

おじさんの青春日記

新世紀特別号

Vol. 15



里吉賢司

新年明けましておめでと〜いざいませ。 旧年中のご厚誼に心よりお礼申し上げます。

新世紀スタートの新春、「おじさんの青春日記 その5」をお届けいたします。

昨年八月六日、広島郵便貯金会館で催された世界的チェリスト、ヨーヨーマ氏のリサイタルに出かけました。演奏曲目はバッハの無伴奏チェロ組曲。

リサイタルのために広島に訪れたヨーヨーマさんは、その日が偶然、広島原爆投下にちなんだ「平和祈念式典」の日にあたることを知り、早朝から一旅行者として式典に出席し、午後からのリサイタルに臨んだとのことでした。

リサイタル終演ののち、広島市内・元安川河畔で開かれる市民による「平和コンサート」にヨーヨーマさんが飛び入りで出演することを知った私は、夕刻おっとり刀で元安川にかけつけました。

原爆ドームの対岸、川岸に設けられた特設ステージから、ヨーヨーマさんが一心に演奏する鎮魂の曲が川面を渡って伝わってきます。陽も暮れて、水面にはたくさんの方々の灯籠流しの明かりがおぼろな光を揺らせて流れていきます。川の両岸に鈴なりになってチェロ曲を聴く市民や旅行者、外国人たちは、夢見ているような深い感動のため息をついていました。

昨春秋、NHKで放送されたドキュメンタリー番組「プロジェクトX 挑戦者たち」の「ルマンを制覇せよ」は放送後、大きな反響が沸き起こりました。

株式会社マツダ（本社・広島）の研究開発に携わる四七人のスタッフが、会社の経営危機やオイルショックなど次々襲う危機を丸となって克服し、最後のチャンス、一九九一年にロータリーエンジン車を世界自動車レースの最高峰、ルマン24時間レースで優勝に導くまでを綴った実に感動的な番組でした。

マツダは大正九年（一九二〇年）の創業以来、八十年にわたって広島を本拠に自動車、機械などの製造にたずさわってきました。日本敗戦までは軍都・広島の大手メーカーとして軍備や兵器の生産にも深く関わり、その後は全果的な規模で広島に世界的レベルの工業技術を集積させる原動力となりました。

原爆の市民の頭上への投下、大量殺戮、破壊、環境汚染、大規模な人間性の否定という現代史上最大の悲劇を体験した都市が、マツダを始めとした先端的かつ広範囲な製造、開発技術をあわせ蓄えていることは稀有（けう）な例ではないかと思えます。

広島のもつ歴史的な普遍性と、この都市の持つずば抜けた技術潜在力が近い将来かならず融合して、従来無い形で地球社会に貢献する時が来るという予感がします。

身をもって熟知するこれらの歴史と可能性を、世紀をまたいで次の世紀に確実に伝えることが出来るのは、いま「おじさん」、「おじいさん」と呼ばれる世代をおいて無い、と思っています。

二十世紀を「進歩と生産、破壊の世紀」と呼ぶなら、二十一世紀は「精神・魂の復活の世紀」となる、なつてほしいもの、と思えます。

「おじさんの青春日記」。このような冊子になつて今回で第5号となりました。

作品を執筆する際、まず念頭に浮かぶのは、小学生、中学生、高校生、社会人一年生の四人の息子たちのこと。

それぞれの人生を自力で切り拓いていかねばならない息子たちが、いつかこの冊子のなかの文字をその眼で追ってくれることを夢見て、私からの遺書の思いもこめて綴っています。日常、子供達を顧みることなく勝手気ままな日々を送る父親からの詫びもこめて。

次に、私の好奇心を十分に満たすに足るドラマチックな出来事を体験する機会を与えて下さり、様々な知見や示唆や影響を与えてくださった多くの方々への感謝をこめたレポートを、という思い。

一生のなかで数限られる人との出会いと交流のなかで、各分野の方々から文字や画像からはとうてい獲得し得ない、多方面にわたる知恵を今も享受し続けることが出来ることは何より幸福なことと思っています。

今回の「おじさんの青春日記」は新しい世紀の始まりを寿（ことほ）ぎ、日本国のスタートライン、『大和の国』を題材とした新世紀特別号といたしました。

カラー表紙、文中イラストはグラフィックデザイナー、栗原俊幸氏の本業を投げうってのご協力によるものです。厚くお礼を申し上げます。

新しい世紀の幕明け。敬愛し、素晴らしい感性をお持ちの方々にごうして『おじさんの青春日記 その5 新世紀特別号』をお送り出来たことに感謝いたします。
ご健康をお祈りいたします。

里吉賢司

二 一年（平成十三年）二十一世紀 元旦

おじさんの青春日記

そのら

新世紀特別号

青春の感傷を胸に秘め、きょうもがんばる、全国の
孤独なおじさんに捧げる

書き手

里吉 賢司

おじさんの青春日記（その5）

目次

プロフェッショナル

第一章 回想 大和古寺風物誌

第二章 プロフェッショナル

第三章 国宝 七支刀（ななつさやのたち）

新世紀突入記念 特別付録

おじさん・おばさん必読！

おじさんの新・国語辞典

おじさんの青春日記 ～その5～

プロフェッショナル

第一章 回想 大和古寺風物誌

私が十代の後半を送った高等学校は、広島市内から電車で三十分ほどの郊外にあった。中学校に入学した直後の六月、父を病気で失ったこともあって、その頃何週間も特別な理由もなく学校を休んでいたことがあった。「不登校」のはしり、だったのかも知れない。街なかの喧騒がそのまま教室に伝わってくるような、殺伐とした校内。無気力な教師や狡猾な生徒の横行する中学校に、私はどうしても馴染むことが出来なかった。

進学した高校は何より、豊かな自然に囲まれていた。瀬戸内海の潮風が心地よく吹きわたる広大な敷地。葦（あし）の茂みに囲まれた広いグラウンドのそばにポプラやメタセコイヤの並木道があり、何十種類もの輝きの異なる緑のなかに、さながらサナトリウムを思わせるような木造の校舎が点在していた。私はしばしば授業を抜け出して海岸で貝掘りをしたり、近くの丘に登って昼寝をしたりしていた。

同級生には近在で農業や漁業を営む家の子供も多かった。彼らは歳時記どおりの農作物の話や、海で働く両親の潮の匂いを教室に運んできた。模擬試験の成績が県下一番という女生徒もいれば、無断で学校を休み、自転車を駆って何日も無銭旅行に出かける強者（つわもの）もいた。

井上先生という小柄な校長先生が毎朝の朝会で、十代の私達には難解な哲学的な箴言（しんげん）や理想をいつも口にしていた。その校長先生からはなぜか、些事にわたる小言や叱責を聞いた記憶がない。

私はこの高校で、よみがえったように高校生活を送っていた。

学校のほぼ中央に藤棚と芝生で囲まれた瀟洒な図書館があった。高校生の私はここで初めて、文芸評論家・亀井勝一郎の著書にふれた。

『大和古寺風物誌』、『我が精神の遍歴』、『私の美術遍歴』。

三センチほどもある厚い本にビッシリと旧仮名使いの活字が埋まった本であったが、ページを繰るごとにその内容の面白さに惹かれていった。

さまざまな文芸作品や社会現象を自己の思想と重ね合わせながら評論していくという手法に、私は未踏の道に足を踏み入れるような新鮮な興奮を覚えた。

秀れた小説や著作も、視点の異なりによってプリズムのようにさまざま多様な光を放つ。

「他を語るなかで自己を語る」文芸評論は、論理展開と構成の面白さ、形式にとらわれない奔放な創造の世界のように思えた。

とりわけ、聖徳太子をはじめとする奈良仏教にまつわる亀井勝一郎の評論は、私にとって七世紀、八世紀の日本へ遡（さかのぼ）る水先案内人のようであった。

仏閣に今も残る仏像はあくまでも瞑想的で、ただ合掌するのみだが、当時、社殿や仏像のすぐほとりで展開された政治や人間模様は、血にまみれ、骨肉相食む凄絶なものであった。

西暦六四年に制定された、聖徳太子の十七条の憲法が机上の理想として生まれたものではなく、朝鮮半島からの渡来人や倭人（わじん）入り乱れての、夥（おびただ）しい流血の果てに成文されたものであったことをその頃知った。

亀井勝一郎は明治四年（一九〇七年）、北海道函館で屈指の資産家といわれる銀行家の家に生まれた。

病弱な生母にかわって勝一郎を可愛がった祖母アサは熱心な浄土真宗の信徒であったが、生家のすぐ隣が函館カトリック教会、近くに聖公会教会、日曜日にはメソジスト教会に通うという和洋の魂が交錯する、エキゾチックな環境のなかで幼年期を送った。

その生家は今も残っていて、函館の町特有の坂道の途上にある。近くの高台に登ると、函館をとりまく荒涼たる外海を見渡すことが出来る。

東は太平洋、西に日本海。函館はこの二つの大海を結ぶ津軽海峡に面していて、北海道の玄関口であると同時に、安政年間に日本で初めて西洋料理店やビヤホールが開業するなど、さまざまな開明的な文化が芽吹いた町でもある。

十歳の時に勝一郎は生母を亡くす。

彼が十三歳、ある雪の朝のこと。暖かな外套に身を包んだ勝一郎が、家族とともにまさに外出しようとしていた時、玄関の扉を叩く音がした。

雪の降りしきる戸外に立っていたのは、地下足袋を履いた電報配達少年であった。

電報を受け取りに出た勝一郎は、その少年が小学校の時の同級生であることに気付く。偶然の再会であった。

手袋もせず、赤くかじかんだ手でその少年は電報を勝一郎に手渡す。

二人ははにかみながら微笑し、まぶしげに互いの姿を見つめあった。

その少年は、無邪気に勝一郎に話しかけた。

「君はいいなあ」

と。

勝一郎はその時の情景が、彼にとって何かの傷跡のように後生にまで残ったと書いていく。

そして彼はその同級生の言葉に対して、その時口にはせずとも咄嗟（とっさ）に答えるべき言葉をその脳裏のなかに持っていたというのである。

彼にとつてその弁明の言葉とは、

「一切は空（くう）だ」

という言葉であったというのだ。

十三歳の少年が、である。

彼はその時の情景を青少年期のひとつの原点と回顧している。

そのうち、亀井勝一郎は東京大学美学科に進むが、大学在学中、プロレタリア文学活動などによって検挙され、二年余を獄中で過ごしている。

マルクシズムから転向した亀井勝一郎は古典と民族精神の研究に浸り、ついには親鸞に傾倒していく。

仏教思想と仏教美術に心を奪われた亀井勝一郎は古典論、日本人論を展開し、昭和十八年、奈良の古寺巡礼をまとめた『大和古寺風物誌』を執筆している。

獄中で転向しマルクシズムを捨てて古典や古代の美に逃れた、と当時や後世の批評家は非難するものもあったが、彼は飄然（ひょうぜん）としばしば大和路を歩き、日本人の心のふるさとともいえる地に多くの思想のヒントを見いだしたのである。

日本が戦いに破れ、国土は疲弊し、国民が失意の底にあったとき、亀井勝一郎は爆撃から奇跡的に免れた奈良、大和路をさまよい歩いて、日本文化の揺り籠の地から精神の再生を唱えたのである。

亀井勝一郎の大和（やまと）についての著作には、彼が幼少の時を送った函館を想起させる濃厚な海外文化の香りがあつた。

太平洋戦争中、日本軍政の支柱となつた国粹的、狭隘な「大和魂」ではなく、古代中国やインド、イタリア、ギリシャ、朝鮮、近代ロシアなどからもたらされた複合的なユーラシア文化に色どられていた。

十七歳の夏休み、私は無謀にも亀井勝一郎氏に手紙を書き送った。

亀井氏の著書への感想文に加え、受験校さえ決まってもいないのに、

「来年春、東京の大学へ入学するので（武蔵野市の自宅に）下宿させてほしい」

という唐突な依頼を書き添えたものだった。しばらくして、氏から返書が届いた。

豊かな毛筆文字の踊る、

「東京へ出てきたら遊びにいらっしやい」

という葉書だった。

高校生の私は有頂天になった。

机上においた葉書を朝に夕にながめつつ、勉強そつちのけで亀井勝一郎や小林秀雄の評論を読みふけり、飛鳥、白鳳時代の仏閣や仏像の研究書をひもといた。

その年、秋も深まった十一月。文芸評論家、日本芸術院会員、亀井勝一郎死去の報を新聞で知った。

どれほどのショックであったことか。

私への返書は壮絶なガンとの闘いのさなかに書かれたものであったことを、のちに訪れた亀井氏宅で未亡人の斐子夫人から聞かされた。

「病室であなたからのお便りを読んで、おもしろい青年だねえ」って、主人、笑ってましたよ」

斐子夫人は井の頭公園の隣にあった亀井氏宅の仏間で、看病疲れで失明寸前の眼を閉じたまま話してくださった。

亀井氏は死の直前まで、日本文化の源流ともいえる古代中国文明への憧れと、当時国交のなかった中華人民共和国との修交を熱く語り続けていたという。

昭和四三年秋、亀井勝一郎氏の三回忌にあたって斐子夫人から頂いた、歌人でもある夫人による追悼の歌集、「終い薔薇」が私の書架に残っている。

洋ふたつ望みてはるか下北もけぶるとふ函館山裾に住む

石舞台きみと行きたる大和路に似る筈もなき吉野川辺に

み仏となりにしひとが書かせたる親鸞の道は切なくて読む

亀井斐子

私の東京生活は亀井勝一郎の死に始まり、一九六一年の日米安保条約騒乱に匹敵する大学騒擾（そつじょう）のうちに過ぎ、三島由紀夫の壮絶な割腹自決をもって終わった。

太平洋戦争敗戦後ちょうど四半世紀を経て、アメリカプラグマティズム（実用主義、成果主義）の津波をかぶった日本の伝統的な精神文化が、変質を露（あらわ）にし始めた時代だった。

少し長くなるが、日本敗戦の年、昭和二十年（一九四五年）秋に書かれた亀井勝一郎著『大和古寺風物誌』のなかから

書簡

古都の友へ

君とともに斑鳩（いかるが）の里を巡ってからもう三年の月日が流れた。その後も春と秋には大和を訪れ、夢殿に詣でたいと願っていたが、空襲は激しくなり、やがて終戦したものの旅はいつそう窮屈となって、昨年と今年はどうとう古寺巡礼を中止せざるをえなかった。この間、僕は東京郊外の茅屋に蟄居して、息づまる思いで世の激しい転変を眺めていた。

東京はおおかた廃墟と化した。昨日までは栄華をきわめていたものが、劫火に家を失って、たちまち路頭に迷い、権勢を誇った武将たちは、今日は捕われの身となって都大路を引かれて行く有様をみると、さながら『平家物語』の世界にあるような気がする。終戦後の僕の感想は、『夢かと思ひなさんとすれば現（うつつ）なり、現かと思へば又夢のごとし』という言葉につきる。

全く諸行無常だ。しかしさすがに自然はありがたい。暴雨に呪われた幾日かをすぎ、いまようやく透明な秋空が現われてきたところだ。

蜻蛉の飛びかう空を眺めていると、まるでなにごとくもなかったかのようになり、平和である。そぞろ旅を思い、大和がなつかしく回想される。斑鳩の里の刈入れは終わったろうか。はるかに君をしのび、こんなとりとめもない手紙を書くのである。

空襲が激化し、朝夕にわが都市が崩壊していったところ、奈良もやがてはこの運命を免れまいと僕は観念していた。夢殿や法隆寺や多くの古寺が、爆撃のもとにたちまち灰燼と帰す日はまちかいと思われた。戦いの終わったのち、その廃墟に立ち、わずかに残った礎の上になかなる涙をそそぐであろうか。そういう日に、なにによって悲しみに堪えようか。自分の悲歌の調べを予想し、心の中であれこれと思いつぐらせてさえいたのであった。国宝級の仏像の疎開は久しい以前から識者のあいだに要望されていた。東大寺や薬師寺の本尊のような大仏は動かしえぬにしても、救世観音や百済観音などは疎開可能であろう。

しかし、僕は仏像の疎開には反対を表明した。災難がふりかかってくるからといって疎開するような仏さまが古来あつたらうか。災厄に殉ずるのが仏ではないか。歴史はそれを証明している。仏像を単なる美術品と思ひこむから疎開などという迷い言が出るのである。そう思ったので僕は反対した。

天平の東大寺は平重衡の兵火にかかって、けなげにも焼けていった。大仏も観音も弥勒も劫火に身を投じた。これが仏の運命というものではなからうか。なにを惜しむ必要がある。惜しむのは人の情であるが、仏は失うべきなものをも有せざるがゆえに仏である。

夢殿や法隆寺に蔵されている多くの古仏が、爆撃の犠牲になるのは実に痛恨事にちがいないが、だからといって疎開を考えるのは、信仰にとつて感傷的なことではなからうか。仏の心に反する行為かもしれない。そう思つて、僕はただ堪えることを考えていた。

無慚な壊滅に堪えうるかどうか。それはわからない。しかし一心に念じて、惨禍の日を忍ばうと覚悟していた

《大和古寺風物誌 斑鳩宮》より

亀井勝一郎をガンで失つてのち、私は何度も一人で奈良の路を歩いた。京都のざわめく華やかさに比べ、奈良はあふれる観光客のなかにも盆地を囲む穏やかな山々や丘が喧騒を吸収してしまふ。町はずれに行くと、先々に古代の静謐（せいひつ）が漂っていた。

温かく、いつでも迎えてくれるような古代の平野が視界にひろがっていた。

結婚して六年目、一九八二年（昭和五七年）の初夏。

私はその年の早春に生まれた長女、萌（もえ）を生後わずか六ヶ月という短命で失った。「乳幼児突然死症候群」。あつけない、娘との別れであった。

いわはしる たるみのうえのさわらびの 萌えいづる春になりけるかも

「萌」、という名は志貴皇子（しきのみこ）の清冽な早春の歌にちなんで、私が名付けたものだった。

萌を失つて二ヶ月後、私は妻と当時五歳の長男をともなつて真夏の奈良に入った。それぞれ語り合う言葉も少なく、胸塞ぐ同じ思いをもつ三人の家族は、神社、仏閣をめぐり歩いた。東大寺、二月堂、三月堂、薬師寺、中宮寺。

妻は訪れる寺院の伽藍すべてで長いあいだ頭を垂れ、手を合わせた。先々に喜捨（きしや）を置いた。

当時、幼稚園児だった長男は、あれほど可愛がっていた妹を失つて傍目にも傷ましいほど悄然としていた。葬儀のあと、火葬場で彼は小さな小さな棺を前にして、

「焼かんという、焼かんという！」と泣きじゃくった。

私たちは彼をただ抱き締めることしか出来なかった。

妹の死は彼の幼心に拭いがたい虚無と無常を植え付けた。それは彼の成長の折り節で、錐（きり）のように鋭敏な感覚となつて現われることがあった。

陽の盛る青春の時代においても、彼は陽が陰る落日のときを遠くに見ているような性向があった。

妻は萌を保育園に預けて、結婚前からの職場に勤め続けていた。生まれ落ちてわずかのうちから、雨の日も、風の日も、雪の日も、朝早く乳児の萌を腕（かいな）に抱き、外套（がいとう）にくるんで勤めに出た。勤めを終えた彼女は一目散に保育園に寄り、萌を抱いて家路を急ぐのである。

新たな起業に苦心する私は、彼女がこうして母子で働いて貯えた預金を事業資金にと奪うことがあったのだ。文句ひとつ言わず、むしろ彼女は進んで私に従った。

私たちは寺院をめぐる巡礼の家族のように、ひたすら堂宇をたずね歩いた。

草深い奈良はあくまで暑く、蝉の声に沸き立つようだった。奈良の、古代からある土道に陽炎（かげろ）がたった。



西大寺から京都に出て、繁華街の店で家族三人言葉少ない夕食の卓を囲んだとき、めまいがするような京の暑さのなかで、
『夢かと思ひなさんとすれば現（うつつ）なり、現かと思へば又夢のごとし』、来世をさまよったのち、重い石を背負ってまた現世にたどり着いたようなひどい疲れにおちいついた。

関西地方を秋の豪雨が襲った夜、新幹線のダイヤは大幅に乱れて、大阪に出張中の私はとうとう最終の新幹線に乗りそびれてしまった。

翌日の早朝、大阪市内のホテルでコーヒーを飲みながら窓の外を見ると、豪雨が過ぎて見事に晴れ上がった青空に、クレヨンで描きなぐったような高い雲がどこまでも続いていた。コーヒーを飲み終えて、急に思い立った。

飛鳥へ、行くことにした。

飛鳥。現在の奈良市から真南へ約二十キロ、現、奈良県高市郡明日香村の一带に栄えた古代の都である。

今から約千四百年前の西暦五九三年、推古天皇が飛鳥の皇居、豊浦宮で即位し、西暦七一年に平城京（現在の奈良市一帯）に都が移るまでの百年余の間が飛鳥の時代といわれている。その後ふたたび飛鳥に都が戻ることはなかった。

古都、飛鳥と呼ばれる領域はせいぜい三十平方キロほど。壮大な古建築群が現存する奈良市周辺に比べ、ここには往時の繁栄を目のあたりにできる寺院や建物はほとんど見あたらない。古墳や苔むす石仏、巨石群が田園ごしに散在する、のどかな田舎町である。春には田一杯の蓮華（れんげ）、秋には曼珠沙華（まんじゅしゃげ）が畔道に沿って深紅の冠をもたげ、

大阪・天王寺から飛鳥へは近鉄電車で一時間ほど。

平日の車内はひっそりとしていて、まばらな乗客が各駅停車の電車の揺れにまかせて居眠りをしていたり、ぼんやりと窓の外を見やっていた。電車のなかの不思議な静けさが古代の町への小旅行にはふさわしく思われて、私は電車が進むごとに 古代へとトコトコさかのぼっていくような錯覚を感じた。

電車は大阪と奈良の県境、二上山のふもとを過ぎ、「橿原神宮前」駅を経て、「飛鳥」駅に着いた。

駅舎を出ると、炎天の陽射しのなかに人影はほとんどない。

駅前に掲げられた市街図をながめている私に、のろのろと走り寄ったタクシーに飛び乗った。車内はエアコンの冷気が心地よく、みるみる汗がひいていく。

「どちらへ参りましょう？」

「高松塚古墳から、天武・持統天皇陵へまわってもらえますか」

「はい、承知いたしました」

糊のきいた白いワイシャツ姿の、五十歳ほどの運転手さんが丁寧に歯切れよく応えてくれた。

「どちらからですか？」

車が動き出し、首を斜めに私を振り向いた運転手さんが柔和な表情で話しかける。

「親しみのある関西弁である。」

「広島からです」

「そうですね。乗っていただいて、ほんとにうれしいですわあ。おおきに、ありがとうございませう」

夏休みが過ぎ、秋の行楽シーズンまではしばらく間のあるこの時期、奈良市から南へ遠く離れたこの飛鳥の町に観光客の姿は見当らなかつた。

タクシーは周辺の景色をゆっくりと楽しめる、ほど良いスピードで野道を東の山腹にむけて走る。

「高松塚古墳も発見された当時は大変なブームだったらしいですが、今ではわざわざ訪ねる人もまばらになりましたわ。奈良は次から次へと新しい発見がありますさかいに」
 運転手さんは気忙しくハンドルを回して、車を山あいの細道へ踏み入れながらつぶやいた。

その日の私は、昭和四七年（一九七二年）の発見当時、日本中を沸かせた高松塚古墳の極彩色壁画の模造画や墳墓のたたずまいを見学したのち、天武・持統天皇陵墓をまわって橿原神宮（かしわらじんぐう）に出、近鉄京都線を経て広島へ帰ろうという計画だった。明るいうちに広島に着ける、と。

高松塚古墳近くにタクシーを留め、私は古墳の上にびっしりとおい茂った竹林の坂道を下りた。竹林をわたるサワサワという風の他は音もなく、蝉の声も絶えた辺りは人影もない。

古墳の周辺を巡ってタクシーに戻ると、その運転手さんはエンジンをつけたまま強い陽射しのなかを威儀を正して車外に立ち、私の帰りを待っていてくれた。

私が恐縮して礼を言くと、その運転手さんは車のドアを開けながらこたえた。

「いやいや、お客様に暑いなかを足もとの悪い山道を登ったり、降りたり歩いてもらうのに、運転手の私だけがクーラーの効いた車のなかでお待ちすることなんて、でけません」
 山道の起伏をたどって息を荒らげ、汗をかきかき車にもどった私は、運転手さんの言葉に、冷たい麦茶を差し出されたような涼やかな気分になった。

運転手さんの名前は佐々岡博さん。飛鳥駅の近く、壺阪山のふもとにある小さなタクシー会社の社員である。

「近頃は家庭の奥さん方が皆さん運転免許を持つてはるから、夜遅うに大阪から帰られるご主人を駅までお出迎え、ですわ。タクシーにや乗ってもらえんようになりました。おまけに観光客はグルメや温泉やと、千年以上も昔に栄えた町なんかになかなか興味を持ってもらえません。このあたりにはこれといった会社や工場もおまへんしなあ」
 車中で、佐々岡さんは問わず語りに話し始めた。

年々少なくなる観光客のこと。土木工事をすれば必ずといっていいほど古代の遺物や遺跡が掘り出され、工事が止まってしまう町の特殊な事情。開発か保存かで堂々巡りを繰り返す町の行政のこと。

大阪まで一時間ほどのここ飛鳥の町にも団地が建ち始め、大都市のベッドタウンになりつつある。古代、牛車や馬、輿（こし）が往来した街路に何層もの時代の土砂が重なり、その上を今、高速で動き回る鮮やかな鉄の車が往き来する。

タクシーが天武・持統天皇陵に近づくころ、私と佐々岡さんは運転席、客席の隔たりを越えてすっかり打ち解け、互いの身の上を語り合った。

ややあつて、佐々岡さんが朗々と和歌を詠じ始めた。

春すぎて夏きたるらし白妙の衣ほしたり天の香具山かくやま

よくご存じだと思えますが、万葉集にある有名な持統天皇のお歌です。ご承知のように持統天皇は女性の帝（みかど）で、天皇に即位されるまでは菟野皇女、『うののひめみこ』と名乗っておられました。

持統天皇のこのあまりにも有名な和歌を、佐々岡さんはハンドルを握りながら、二度、三度と詠じた。やや甲高い、よく通る声だった。

「百人一首にもあるこの有名な歌に隠れて、あまり知られてはいませんが、持統天皇はこれ以外にもいかにも女性らしい、ゆかしいお歌を残しておられます。

北山にたなびく雲の青雲の星離り行き月を離りて

菟野皇女は天智天皇の二番目の皇女で、叔父にあたる大海人皇子、のちの天武天皇にあたる方ですが、この皇子に嫁がれました。現代でいう血族結婚ですわなあ。

父である天智天皇は後継者に子の大友皇子をあてようとしますが、天智天皇が崩御されたのち、この大友皇子と夫である大海人皇子との間で大変な騒乱が生まれます。今でいう会社の後継者争いですわ。そうです、壬申の乱です。

西暦六七二年にこの戦に勝った大海人皇子は、ここ飛鳥の浄御原（きよみはら）で天武天皇として即位されます。天武天皇は病気がちで、政務のほとんどは皇后である菟野皇女が執っておられました。女性ながら肝のすわった政治力のある方だったんでしょねえ、夫である天武天皇が崩御されると、ただちにその地位を継承されました。

最愛の息子である草壁皇子と、壬申の乱の折りの盟友であった甥の大津皇子が対立して、大津皇子に謀反の動きがあると知るや、即刻大津皇子を逮捕して、この飛鳥からほど近い今の桜井市で処刑してしまいます。その直後、自分の後継者として成長を待ち望んだ草壁皇子は病死してしまわれます。

骨肉相食むというか、肉親縁者入り乱れての争いや流血。そして頼りに思う夫や息子とも死別し、親族をも手にかけてしまった自分。

北山にたなびく雲の青雲の星離り行き月を離りて

という持統天皇のお歌。

北山にたなびいている青雲が遠くへ離れていってしまう。星たちからも離れ、そして月からも遠くはなれていってしまう。最高の権力者の地位に就いた女帝、持統天皇はんの

孤独というか、悲哀や苦悩が切ないほどに伝わってくると思われませんか？」

タクシードライバー、佐々岡さんはハンドルを握ったまま真つすぐに正面を向き、時に唾を飛ばしながら一気に語り終えた。

繰り返して詠じられる持統天皇の御製歌は、彼のやや高くかすれた声の独特の音律にかかる

と、現代の悲歌のように胸にせまってきた。
「いやあ、それにしてもすごいですねえ。佐々岡さん、万葉集、ぜんぶ憶えているんですか？」

車内に次々と湧き響く万葉の歌に、私は耳を疑った。

彼は辻々の野に立つ小さな遺跡や石仏を私が尋ねると、間髪を入れずその由来や当時の政治背景、関わりのある万葉の歌をよどみなく披露してくれる。

タクシーというよりも、図書館を丸ごと詰め込んで走るトラックのようであった。

どうやら彼の頭のなかには日本の、とりわけ古代の歴史が立体的に組み立てられていて、その時代の人物像や政治的な背景に彼独特の解釈も持っているらしい。

秀でた記憶力や博識、というよりも、人間や歴史への深い見識と洞察を感じさせた。

しかも彼は日常の仕事のなかで、時代ごとに変遷した街路や地理、遺物の配置を知り尽くしている上に、この町に昔から住む古代人の末裔（まつえい）達の伝承や世情にも通じている。

「佐々岡さん、気が変わった。予定変更じゃ。今晚中に広島へ帰り着くことにして、もつと飛鳥の町をあちこち見せてもらえんじやろうか？」

「えっ、ほんまでっか？ そりゃあ、ありがたいことですわ。まだまだ、飛鳥にはめつたに人も行かんような、そりゃあ、見て頂きたいところが一杯ありますねん。会社と相談して、料金、精一杯サーブスさせてもらいますわ」

「佐々岡さん、きょうは、貸し切りじゃあ！」
後部座席から叫ぶ私の声に、彼はうれしそうにタクシーを反転させた。

*

それからというもの、年に一度、二年に一度と、私は佐々岡さんが運転するタクシーの客となった。

彼は私が大和路を訪れることを楽しみにしてくるようになった。
あらかじめ次の希望地を知らせると、彼は自分で調べたその地の歴史や地図を手書きのメモにして私に渡してくれることがあった。正月には彼らしい几帳面な字で、近況を伝える丁寧な年賀状が届いた。古代、年月や方角を表した干支（えと）を意匠した便りは、飛鳥人から送られてきたように雅びなものだった。

出張先での商談が不調に終ったり、事業の数字が長い間頭から離れないとき、彼の一貫して変わらぬ篤実な人柄に触れ、ともに大和の道を巡ると、それらがつかの間霧散するようだった。

大和の風物に触れることよりも、むしろ彼に出会うことを楽しみに奈良へ通うのかもしれない。

東京や関西への出張の帰途、途中下車して奈良へ迂回すると、私を待つ彼の黒塗りのタクシーが車体をピカピカに光らせて、駅前そのままに停められていた。

彼はいつも駅員の制止を無視してホームへ入り、顔をほころばせながら、電車から降り立つ私の手を固く握りしめる。別れるときは、その何倍もの力で私の手を握り返し、離そうとしない。数年に一度、たった半日の逢瀬（おうせ）である。

「奈良は日本の国のほぼまんなかあたりにありますわなあ。いわば、日本のへそ、ですわ。今の日本の、国家としての形はここから始まったわけです。幸い、奈良は戦争中アメリカさんの爆撃にもあわんですみました。まあ、さしたる産業もないし、お国の繁栄からも、なんかここだけ置いてきぼりだったような所ですわ。でもここは、百年、千年という単位で、日本の国の移ろいを肌で感じられる所でもあるわけですよ。私ら、『日本のへそ』の上から、北海道から沖縄、この国のありさまをながめて暮らします」



奈良や飛鳥の地をいとおしく思い、日々を淡々と送る佐々岡さんの暮らしぶりが言葉の端々からにじみ伝わってくる。

「ここへ住んでみて、思うんですわ。東京や、大阪や、人の大勢集まった街で、皆さん、景気や株や情報やゆつて、毎日気ぜわしゅうにワアワア頑張ってはる。そやかて、政治も経済も時の流れ。相手があるこつちや。いつもいつも、そうそう、うもういきませんかな……。」

それに、日本国中が、なんでもかんでも、早う、早う、いうて、めまぐるしいこつてすわ。なんでもスピード第一になつてしまつたら、待つ楽しみや、間(ま)ちゅうもんも、あらしません。

もしも万が一、日本の国がたちいかんようになつたら、またみんなでこの大和の国から、一歩から出直しゃええやないか、思いますねん。

都会の人も、不遇のときは故郷のことを思い出しますやろ？ 大和の国は、日本のふるさとなんやから

タクシーのなかでの佐々岡さんとの世間話は、いつもこんな調子だった。

私は苦笑いしながら、彼の話に聞き入る。

彼と私は春盛りの三輪山のふもとで素麺を食べ、紅葉の談山神社で中大兄皇子と藤原鎌足たちの謀議を語りあった。

偶然にも佐々岡さんは広島生まれだった。

太平洋戦争が始まった昭和一六年に生まれた彼は、乳児の頃にお母さんの実家のある島根県浜田市郊外に転居し、そこで育った。

「広島へ原爆が落ちて二、三年経つた頃でしょうか。母に連れられて広島に行ったことがあるんです。当時、浜田を夜九時頃出る広島行きバスがありましてなあ。

中国山地をエンヤラエンヤラ、息を切らせてオンボロのバスが登るんですわ。石見今市、坂本、三坂峠、大朝、今でも憶えています。大朝でガソリンを注いでひと休み。加計を通つて広島横川へ着くのは朝の六時頃でした。今なら、高速道路でたったの二時間でっしやる？ 田舎育ちの私にとって、当時の広島といやあ、そりゃあもう大都会でした。

その広島が原爆で見渡す限りの廃墟になってました。飴のようにねじ曲がった大きな鉄骨があちこちに倒れていて、横川の駅からも海が見渡せました。

戦(いくさ)とはいえ、ひどいことしやる、幼な心にそう思いました

学校を卒業して大阪へ出た彼は、道修町の薬品商社に就職した。二九歳で結婚。箕面市に所帯を持った。

「三十一のときに初めてポーターナスで扇風機ちゅうもんを買いましたん。うれしかったですわあ。今の家にはエアコンなんて当たり前やけど、あの時の扇風機、忘れさせん。狭うて暑い借家で、嫁はんとかわるがるに扇風機の風を顔にあてて、」

「ええなあ、ええなあ」
ゆつて二人で言い合つたもんですわ。ちょうどその頃、箕面市に日本で初めてちゅう、アメリカ資本のミスタードーナツちゅう店が出来ましてねえ。いろんな種類の、しかも、あつたかいドーナツちゅうもん、初めて食べましたわ。うまかつたですわあ。なんでもかんでも、アメリカさんの言いなりやなあ、思いました

しばらくして、奈良県飛鳥の里に自宅を購入した彼は、大阪市内に通勤し始める。

「会社の先輩や同僚は、若いのに家なんか買つて、転勤になつたらどうすんねん、言いました。でも私は十歳の時に父親を亡くして以来、いつか自分の力で家を建てたい、きちんとした自分の城を持ちたい、思い続けてましてん。そのために、就職したときから、わずかつ

つ備えをしてたんですわ」

飛鳥時代の面影の残る町に幼い頃からの夢であった城をもった彼は、体の不調もあって、大阪市内への通勤をあきらめ、地元のタクシードライバーに転職する。四五歳のときであった。

島根県の田舎町に育った彼は飛鳥の町に移り住み、そこで働くことで、老後も見通せる安らぎを覚えるようになった。

しかし、彼のタクシー運転手としての道は平坦ではなかった。

「なんちゅうても、飛鳥の町は舗装もされていない、細い田舎道が多おまつしやる？ まず、道を覚えるのにほんまに苦労しましたわ。地図にも載ってへんような細道がいっぱいありますねん。何年もかかりました」

タクシーのなかって、ホンマ、人生の束の間の舞台ですねん。家族からも見放された息絶え絶えのお年寄りを病院に担ぎこんだり、酔っ払いのお客さんにしつこくからまられたり、女性のお客さんにワアワア泣かれて愚痴を聞かされたり

純朴な彼が新米のタクシー運転手として右往左往する姿が目に見えなくて、思わず笑いがこみあげてくる。

「奈良は数えたらキリがないほどお寺や神社、遺跡がありますやろ。」

お客さんに聞かれますねん。あの寺、なんちゅう寺？ このけつたいな石、なんやねん？ て。こう見えても私、若い頃はアウトドア派で、冬にはスキーや登山やいうて結構あちこちしてましてん。歴史のことなんか関心もないし、線香臭いお寺のことなんか、さっぱりでしたわ。

でも、年のせいもあるんでしょうかねえ、いろんなこと、考えますねん。好きで移り住んだ飛鳥の町や。それに、自分で選んだ運転手の仕事や。この町に住んではるお客さんや、遠方から来られるお客さんが私の車に乗ってくれはるお陰で、私ら家族は生きていける。

運転技術やマナーはもちろんのこと、この町のことはお客さんから何を尋ねられてもお答え出来る、お客さんに満足していただける、プロフェッショナルと言われる運転手にならなあかんあ、思い始めましてん。

それからですわ、勉強始めたんは。少しずつ解つてくると、だんだん面白うなつてきましてなあ

町の情勢や近郊の地理を会得した佐々岡運転手は、一日の仕事を終えたあと、日本史や古代史の勉強を始めた。四十を半ば越えた彼が歴史の年表を理解するには、若い頃の三倍も四倍もの労力が必要だった。

勤務を終えたあと、ビデオに録画しておいた教育テレビを見ながらメモをとる。地元で開かれる発掘調査の現地説明会には可能なかぎり顔を出す。「万葉は生まれた風土ぬきには理解できない」という識者の言葉に従って、休日には資料を手に一円の遺跡や寺社をたずね歩いた。

全二十巻、約四千五百余首におよぶ万葉集はその文字だけでなく、その歌が生まれた場所に立って朗々と吟詠することで、万葉の音律を体にしみ込ませた。

歴史と遺物、そしてそこで生まれた万葉の詩歌が、彼のなかで骨と筋肉と神経のように立体になっていった。

彼が恩師と呼ぶ人は、仏像製法や修復の大家で京都・愛宕念仏寺住職でもある西村公朝さん、歌人の前登志夫さん。いずれもNHK市民大学講座などを視聴することで、彼が自分で決めた恩師なのである。

人はさまざまな思いを抱いて、遠くから飛鳥を訪れる。そこには壮大、絢爛（けんらん）

たる仏閣や仏像があるわけではなく、草木に覆われた土中からのぞく石仏や礎石が立ち並ぶだけである。飛鳥人の夢のあとには幾層もの深い土におおわれて眠っている。
ある人は飛鳥を「想像の古跡」と呼ぶ。その土地に触れ、人に触れることで、万葉の当時を想像する他にないのである。その地で、しばしの時であれ、たまたま彼のタクシーに乗りあわせたことで、どれだけの人が飛鳥をなおさらに忘れがたいものにしたことだろう。

何度目かの奈良での出会いのあと、たそがれの田園のなかを私を駆まで送る車中、佐々岡さんはハンドルを手に語りかけた。

「飛鳥の道のほとりにこんな歌を刻んだ石碑があるんです。

世のなかの繁しき假かり廬いに住み住みて 至らむ国のたづき知らずも

うるさい仮かりずまいのような人の世に住み続けていて、『至らむ国』、というのは、おそらく来世のことでしょうね、これからどんな様子の来世へ行きつくんだろう、という意味だと思います。

万葉集というのは天皇さんや貴族のような高貴な人たちがばかりの歌じゃのうて、身分の低い庶民の哀あはれをうたったものも集められていますわな。この歌もおそらくそんな庶民の素朴な思いを歌にしたもんでっしゃる。人の暮らして、今も昔も同じですわ。

わたしねえ、この一帯にある壮大な仏閣や陵墓を見るたびに想像しますねん。権力や家柄とは縁もない無数の民草（たみくさ）のことを想像するんです。

歴史の記録にその名はカケラも残ってへんけど、本当は、彼らが日本の歴史を築いたんや、つて。

御輿（みこし）に乗る貴い人、その御輿の二本の支棒を担いだ人もあれば、権力者の死後に、途方もない墓を造るために巨石を運ぶ修羅（しゅら）を引いた農民たちや奴隷同様の人々たち。

わたし思いますねん、彼らは日々何を楽しみにして、生きがいにして、当時を生きていたんやらかつて。彼らは一日中、石を運んだり穴を掘ったり、陽が暮れたらわずかな米や粟（あわ）を与えられて家路についたんでしょ。そこには愛する家族や恋人が待ってたことことでっしゃる。

持統天皇はんが夫を思い、子を思う気持ちとまったく同じなんです。

わたし、箕面みづので初めて所帯とらひを持って、ポーナスで扇風機せんぷうきを買って帰ったとき、嫁はん、えらい喜んでくれました。私は便利な道具を手に入れたことがうれしinyのうて、嫁はんの喜ぶ顔を見ることがうれしかつたんですわ。

六十に近いオッサンがこんなこと言うて、なんや青くさい、って思わはるかも知れませんが、わたし、歴史しつて、人間にんげんて、やつぱり『愛』や、思いますねん。

親が子に寄せる愛、夫婦の愛、男と女の愛、兄弟の愛 『愛』があるからこそ人は生きていける。そんなんが積もり積もって人間の歴史を作る。

生きていくには、愛が必要なんや。

たまさか、その人が権力をもってるから、愛が業（ごう）につながつて、悲劇を生む。永遠の富も命も、永遠の愛もあらしまへんのになあ。

万葉集のほとんども、人を想う心で埋められていますわ。

ああ、もう、そろそろ西大寺の駅ですわ。

ほんま、よう来てくれはりました。きょうもお陰さまで楽しい一日でした。お仕事、いろいろ大変でっしゃるけど、体気ていけいつけてくださいねえ。むやみな欲出したらあきませんよあ。今度はいつ、お会い出来まこすやろなあ

第三章 国宝 七支刀（ななつさやのたち）

大学を卒業して間もなく、私は父の遺した工場を受け継いだ。理容院で使われる電気バリカンの製造事業である。

父が健在の頃は軽量で手によくなじみ、鋭利な切れ味が長続きするヒコーキ印の電気バリカンは全国の理容院の人気を集め、国内でも有数のシェアを占有していた。

理容師にとって電気バリカンは鉄（はさみ）や剃刀（かみそり）と並んで、日々の仕事に欠かせない大切な利器であり、電気器具というよりも「刃物」としての高い完成度を求められていた。

「バリカン」という言葉はれっきとしたフランス語なのだが、なぜか垢抜けしない言葉の響きをもっている。幼い頃、私は同級生や近所の人に、「バリカン屋の息子」と揶揄（やゆ）され、その言葉のもつ音（おん）をうとましく思っていた。

闊達で、やや大風呂敷を広げる傾向のあった父は事業創業の際、『地球全土にあまねく製品が行きわたるように』と、地球ヒコーキという商標と飛行機の形をしたトレードマークを真鍮（しんちゆう）製の銘板に刻印した。

私や姉達は夜遅くまで電気バリカンの「取り扱い説明書」やカタログを折り畳む手伝いをさせられていた。

十二歳のとき父が亡くなり、遺された子供を養うためにその後の十年余経営を受け継いだ母、そして私の代となるに及んで、音楽グループ、ビートルズの出現をきっかけにした長髪ブームもあって、年ごとに電気バリカンの出荷数は減り続けていった。

電気バリカンは優れた理容技術さえあれば、鉄（はさみ）以上の機能を果たしたが、世の中が落ち着き、嗜好が贅沢になるつれて、髪型にも多様なカット技術が求められるようになった。鉄や剃刀を使い分け、十分な時間をかけて調髪する理容院がもてはやされるようになった。

電気バリカン工場の職人は一人また一人と辞めていった。

幼い頃から機械の部品や工具をおもちゃに育ったとはいえ、文系の大学を出たての私にとって、もの造りの事業はほとんど未知の世界であった。

ある時私は電気バリカンの生命といえる、「刃」の全製造工程を自分一人で手がける作業に挑戦した。

電気バリカンの刃は島根県安来市にある日立金属安来工場で製造された、特注の刃物鋼を使用していた。いわゆるヤスギ鋼（はがね）である。

広島県北部から島根県にかけての山地は、古来から良質の砂鉄の産地として知られている。

中国山地を源流に、奥出雲を経て宍道湖へ注ぐ斐伊川（ひいがわ）、安来市を貫き中海に注ぐ飯梨川（いいなしがわ）の上流域は、砂鉄のなかでも最上質といわれる真砂砂鉄（まささてつ）が大量に採取される地域である。

先年、大量の銅剣や銅鐸が発見された荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡はその至近にあり、真西には出雲大社がそびえている。古代出雲の「草薙（くさなぎ）の剣」などの神話には、この地域に産する砂鉄や刃物技術との密接な関係をつかがわせるものも多い。

日立金属は古代出雲を背景にした土地に工場を展開し、豊富に採取される砂鉄などの原料に独特の精錬技術を加えて、現在も世界屈指の品質をもつ刃物鋼を量産している。

電気バリカンは約40ミリ角、厚さ5ミリほどの固定刃の上を、ほぼ同じ幅をした三角形の可動刃が電磁石の力で往復し、固定刃と可動刃が摺動することで髪の毛を切っていく。密

着する固定刃と可動刃は千分の数ミリ単位で研磨される。しかも、長時間使用しても切れ味が落ちないように、固定刃に接する可動刃の先端はミクロン単位の湾曲をつけた刃研ぎを施される。

日立金属から購入した全長四メートル近い薄板の条鋼を、一枚づつ刃の大きさに切断し固定刃の素材を作る。

切断した鋼材を重ね合わせ、フライス盤と呼ばれる工作機械で材料の角部を湾曲に切削する。

次に装飾のため刃の平坦部を線状に切削する。その裏面に深さ三ミリほどの二条の溝を切削。

もつとも困難で重要な工程が刃先部分の切削である。刃先の厚さはわずか、三ミリ。二十本ほどの刃先を一組の超硬工具で一気に切削形成していく作業である。

工具が熱を持たないように、削り落ちた鉄粉がスムーズに排出されるように、刃の先端に切削油を注ぎながら慎重に切削を進めていく。

百分の一ミリ単位のわずかなミスがそれまでの工程と材料を無駄にしてしまう。

機械による加工がすんだら、仕上げのヤスリ入れ。手作業である。切れ味を良くするため極薄のヤスリを使って一ミリに満たない刃と刃の隙間を、ちょうど糸歯ブラシで歯間を磨くように手で仕上げていく。

固定刃と可動刃を合わせた一組の刃の製造工程は約二十工程におよぶ。

形が出来上がった刃はまだ生命を持たない。鋼（はがね）製品でもつとも重要な、熱処理工程を経て鋼は生命を吹き込まれる。

工場の北裏手、太陽の光がほとんど射し込まないところに昔、「焼き入れ場」と呼ばれるコンクリート作りの部屋があった。

幼い頃、丸吉さんという焼き入れ職人が朝から晩まで、鼻の穴を真っ黒にして一心に刃の焼き入れの作業を続けていた。

「ほら、鋼（はがね）を熱したら鋼の色が変わってきたじゃろ？ 鋼の温度はもう六百度近くになつとるんじゃ。もう少ししたらだんだん赤うなってくる。鋼の赤色いうても、いろいろあつてのお。みかん色、桃色、あかね色 その日の陽の具合によつても色が変わって見えるんじゃ」

「ゴーゴーと音をたてて炎をあげる焼き入れ炉を恐る恐るのぞきこむ私に、彼は得意そうに話してくれていた。

温度計も使わず、彼は数度の温度の違いを赤熱した鋼の色や匂いで識別していた。

父や職人たちは顧客や鉄鋼メーカーの担当者が訪れても、決してこの焼き入れ場には案内しなかった。

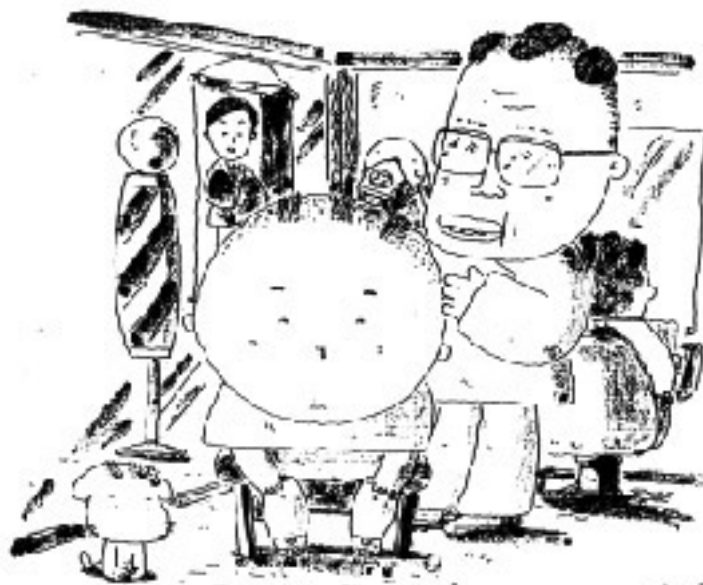
父が健在の頃、毎年暮れの十二月八日は「吹子（ふいご）祭り」を盛大に祝っていた。火の神様、「吹子さん」は火を扱う工場の年一回のお祭りである。

「吹子（ふいご）」とは鍛冶屋や鋳物工房などで燃やす木炭やコークスなどの火勢を増すために、密閉した長方形の箱のなかの板状のピストンを手で往復させて火口に風を送りこむ、古代からの送風器のことである。

西暦七二一年に編纂された「日本書紀」にも『あまのはぶき』という皮袋状の「吹子」の記述があり、さらにそのルーツはシルクロードをさかのぼって、古代オリエントにも行き着くという。

「吹子さん」の機嫌を損ねると、いい刃物が出来ない。

十二月八日の朝、父は酒や魚、餅など神様への供物を三方（さんぼう）に載せ、うやうやしく拝礼して焼き入れ場の炉の上に乗せる。



父は姉や母、女性がその場に立ち合うことを嫌ったが、唯一の息子である私にはこと細かに炉の構造や焼き入れの工程を話してくれた。しかし、一子相伝の秘術を父から伝授されるには、私はあまりにも幼かった。

「ふいご祭り」の夜、自宅の宴席での父は声高に職人達に酒を注いでまわり、主役の丸吉さんは酒で顔をゆでダコのように真っ赤にして、いつになく饒舌で笑顔が絶えなかった。

フライス盤で切削成形した鋼刃を数十枚を重ね合わせて、坩堝（るつぼ）と呼ばれる鉄成の容器に入れる。

坩堝の周囲には高温での加熱が鋼製品に及ぼす弊害を最小限に押さえるために、木炭の粉と炭酸バリウムなどの薬品を混ぜた粉末を充填する。この坩堝を焼き入れ炉の中央に置き、炉内を重油バーナーで加熱していく。坩堝がおよそ八百度を超え、赤い炎が立ち始めた頃、刃を坩堝から取り出し、間髪入れず焼き入れ油のなかに投入して急冷させる。

たちまち油から炎が上がり、やがて油煙がたちのぼる。この作業によって、瞬間、鋼は製鉄所から出荷された時とはまったく性質を異にした、硬い刃物に変身する。

さらに、硬さのみでなく衝撃にも強い靱性（じんせい）を持ち、変形しにくい刃物にするために低温で焼き戻しを行なう。

切れ味が良く、そしてしなやかな刃物がこうして出来上がっていく。

電気バリカンの刃の全製造工程を一人で終えた私は、出来上がった刃を手にして深い絶望感に陥（おちい）った。当然のこととはいえ、それは職人たちが作り出す製品とは似ても似つかぬ、いびつで、醜悪な姿をしていた。むろん、顧客に送れるような品物ではない。

幼い頃、工場で働いていた職人たちも、そして父も冶金（やきん）や鉄鋼材料の専門知識はほとんど持ち合わせていなかった。

幼い私の
「なぜ？ どうして？」

という工程にまつわる幼稚な質問に、科学を根拠に明快に系統だてて説明してくれるものは周囲に誰一人としていなかった。

彼らは無数の試行錯誤や失望、莫大な時間を費やして体得した経験と勘に頼って作業を続け、産み出された製品は全国の手厳しいユーザーの信頼を獲得していた。

父は数十年にわたって彼が貯えていたに違いない無数の知見を、唯一の息子である私にほとんど伝えぬままに死んでいった。

理論的に説明され尽くされていない熱処理や金属加工の分野とはいえ、科学的、体系的な工学理論と、古来からの伝承と経験とを繰り返し対照させながら作業しない限り、事業としての進歩は望めない。この頃私はこのことを強く感じていた。

同時に、火と鉄の恩恵によって糧（かて）を得て高等教育まで受け、あまつさえその家業を継ぎながら、事業の根幹に関わる知識をほとんど持ち合わせていない自分を恥ずかしく思い、そして不安におちいった。

父の死後、経営にあたった母もすでに六十歳を過ぎていた。年ごとに細る電気バリカン製造事業の継続をめぐって、母と何度となく議論を繰り返した。工場の職人として技の修練を積むにはその素養さえなく、師となる人もない。試行錯誤のなかで、決断を迫られていた。

私は当時広島市内にあった広島大学工学部や、県や市の工業技術研究施設に足繁く通うようになった。伝手（つて）を頼って紹介を受けた工学系の先生に、工業学問の基礎から教えるを請うためであった。

彼らは教室や研究室でノートをとる、学生にしてはやや歳のいった闖入者である私をも珍しそくに歓迎してくれた。

金属を溶解し、木型や金型に沿って所定の形に形成していく鑄造学の片島先生。

チタン合金や耐熱合金など、切削加工が困難な材料の研究分野では国内でも権威といわれる鳴瀧先生。些事にとらわれない、大らかな笑い声で独特の人間的魅力をもっておられた塑成加工学の大森先生。炭素繊維材料やアモルファス合金など、先端的な工業材料学を講じておられた福永先生。広島県特産のヤスリの研究では斯界第一人者の荻山先生。

「0・8%の炭素を含んだ鋼の焼き入れ硬度は、ロックウエルCスケール硬度で63、64には上がるだろうね」

「それは水焼き入れの硬さだろ？ 油焼き入れならどれくらいになるんだろ？」

「油焼き入れて言っても、油の温度で変わってくるはずだしなあ」

「焼き入れする油の温度は70 前後で、それでやるとCスケールで62つてところかな」

「油の質によっても焼き入れの挙動が変わってくるかもしれないねえ」

「うん、それは面白い方向かもしれん」

わずかな科学現象の違いを延々と議論する彼ら。データの差異に一喜一憂し、膨大な時間と情熱を研究に注ぎ込む彼ら。彼らの研究テーマが専門学問の分野で、どの座標を占めるのか、その成果が一体どういう貢献につながるのか、私には解らないことだらけだった。

しかし私は幼い頃、父の工場で何気なく目にしてきた情景が、様々な分野の学問的アプローチを内包していたことを直感した。

研究者たちの学問への執着と労力。自然科学の森のなかで、彼らがさ迷いながら究めようとしていること。そして、そのことに一生を賭けようとしている人たちが眼前にいることを知っただけで、私は物造りの事業のなかでとりあえず選ぶべき進路のいくつかが明確になったような気がした。

電気バリカン製造事業から新分野への転換がようやく軌道に乗り始めてから、私の会社はついに私以外、電気バリカンのことを知る者はいなくなってしまうた。

新しく入社した社員は、今も残る電気バリカンを骨董品を扱うように恐る恐る手にとる。時折り私はかつて木造の電気バリカン製造工場で各工程を受け持っていた、職人達のことを思い出すことがある。

油の匂いが充満する部屋で鋼の切削部分に目を凝らすもの。日がな一日、高温の熱処理室で黙々と火炎と対話し続けるもの。火花を飛ばしながらグラインダーで一心に刃を研削するもの。電気配線を結線しながら、独り言をつぶやきながら器体を組み上げていくもの。

彼らは一台一台微妙に異なった性格をもつ電気バリカンを、時間をかけて丁寧に調製していった。彼らは武骨で頑固だったが、今思うと彼らの仕事はその時代においては高度に専門化された最高の手工技術であった。

大量生産方式が普及するにつれて、日本の工場から「職人」と呼べる人たちが急速に姿を消していった。私の仕事はといえば、現場の機械や工具、設計図に触れることから離れがちとなり、もっぱら人との社交や儀礼、書類の処理に明け暮れるようになってしまった。生前父が話していた「創案をもとに手足を動かし、ものを産み、造ることの感動」を忘れた墮落、と自らを思うことがある。

日本の基幹産業がもの造りから離れ、それはあたかも無用のもののように金融操作や情報伝達サービスなどの分野に邁進しつつある。

五体を駆使して造り上げ、あるいは作物を収穫し、ずっとしりとした実体の成果を手にする喜びを忘れた社会が、人間の根本になつた幸福をもたらすとはどうしても思えない。

*

奈良の都は周囲を山々に囲まれた盆地の古都である。

北は木津川、旧奈良街道を経て後世の都、京都へ。西方の葛城山、生駒山の連山を越えると河内（現・大阪府）の国。東方に接する伊勢国（現・三重県）の山々を縫う道の果ては伊勢神宮。そして南は飛鳥の旧都から紀伊半島先端に続く吉野・熊野の鬱蒼とした深山が連なる。

現在の奈良市の南、奈良県天理市布留町に石上神宮（いそのかみじんぐう）がある。

古来から日本にある神社のなかで、その由来が古文書とほぼ一致する古社は少ないが、石上神宮はその数少ない一社である。この神社には多くの貴重な遺物が神宝として現在も保管されている。

「古事記」や「日本書紀」によると、神武天皇が東征しながら紀伊国熊野へ達した折、その土地の神の毒気によつて兵卒の多くが病にかかつて氣力を失い、進軍出来なくなつてしまった。この時、武甕槌命（たけみかづちのみこと）が、「平国之剣（くにむけしづるぎ）」を用いたところ、この剣の威力によつてたちまち兵卒の病は治まり、再び進軍を開始することが出来たという。

その後天皇は橿原（かしわら）に都を定めた時、物部氏の先祖である宇摩志麻治命（うましまじのみこと）に命じ、国を守る神としてこの剣を宮中で祀らせた。

石上神宮は古代から武器、軍事などを司つた物部氏の氏神として知られており、当時の宮内の倉庫にはおびただしい量の武具が有事に備えて保管されていたという。

なかでも石上神宮に伝わる宝物のひとつ、「七支刀（ななつさやのたち）」は 古代から石上神宮に伝わる極めて重要な神宝である。

この錆びた、一見すると道端に放置された古鉄のように見える刀は、一九五三年十一月、日本国国宝に指定された。

国宝であると同時に神社の宝物であるため七支刀は神宮の奥深く、校倉作りの宝庫（神庫）に厳重に保管されており、一般人が目にすることは出来ない。

高校時代、日本史の教科書にこの古びた「七支刀」の写真が載っていて、それからもずっとその刀の異形（いぎょう）が私の脳裏に焼き付いていた。歴史書に紹介される、刀身の真っ直ぐな他の古代の直刀や短剣とは明らかに異なつたその刀は、写真を見る者を突き刺すような神秘的魔力を放っていた。武器というよりも魂の象徴、強烈な意志の放射、である。

十代の私に、将来いつかこの刀と関わりを持つてあるうという暗示と、霊験のようなものを感じさせた。

法律の大学を卒業したのち専門知識もないまま電気バリカンの製造事業の世界に飛び込んだ私は、地元大学の工学部や公立の研究機関、図書館に繁く通いながら仕事のなかでの骨身にしみる失敗を重ねることで、皮相ではあるものの機械工業の基礎的な知識をどうにか身につけることが出来た。その頃、あれほど苦手だった化学や物理に関わる見識の如何（いかん）が、自分の明日の糧（かて）を左右するという皮肉な日々を送っていた。怠慢と努力の結果は「成績表」ではなく、事業の月々の「損益表」に明快に表れた。工業、とりわけ金属加工技術についての知見が深まるにつれて、高校以来意識の底にあった七支刀、その卓抜した製作技術や歴史への関心が私のなかで首をもたげてきた。



「七支刀」復元レプリカ
大阪府立近つ飛鳥博物館図録より

目を奪われるのはこの刀の異様な形である。刀の中心部から左右交互に火炎が燃えあがるように三本の小剣が天に向かって枝分かれしており、しかもその中心刀部と枝分かれた支刀部分とも、断面はほぼ菱形に鍛えられているという。

大阪府南河内郡にある「大阪府立近つ飛鳥博物館」に、この七支刀が製作された当初の状態を推定して復元模造されたレプリカがある。

白銀色に輝く中央刀身から左右に延びる六本の支刀も断面を菱形に丹念な刃つけが施されている。実用の一本の武器というよりも、魔性をそなえ、権威や魂の象徴のような光彩を放っている。

史料写真によれば、石上神宮に現存する七支刀は深い錆びに覆われ、折損もあるが、刀身中央の裏表に六十一文字の銘文が刻まれており、刻字には金の象嵌（ぞうがん）が施されている。

刻まれて千五百年余を経た銘文は錆や損傷によって全文を解読することは至難といわれるが、その文字の解明に多くの研究者達が挑戦した。

そのひとり、建築史家、福山俊男氏の説による銘文の大意は次のとおりである。

（表） 泰和四年（注・西暦三六九年）の五月十六日、丙午（ひのえうま）の

正午の時刻に、百度鍛えた鋼の七支刀を造る。これをもつものはあらゆる
兵力の害を免れるであろう。これは侯王の供物に適する （注・解読
不能）の作である。

（裏）

先代以来まだこのような刀はなかった。百濟王（注・肖古王）と世子は、
生を御恩に依っているので、倭王（注・日本の王）の御旨によって造った。
後世に永く伝わるように。

この刀が造られた四世紀、朝鮮半島の古代国家である百済国と倭国（日本）は親密な国交があり、その往来のなかで日本に渡ってきたものと伝えられている。

国宝史料によると、この七支刀（または六叉の銚「ろくさのほこ」）、素材は「鍛鉄製」、全長七四・九センチ、推定四〜五世紀の作とある。

「鍛」とは字のとおり、鍛える、叩く、の意。この七支刀は、江戸時代の日本刀のように棒状の玉鋼（たまはがね）を加熱しながら槌で鍛え、刀の形を形成していく作業とはわけが違ふ。

中央刀身から絶妙のバランスで互い違いに左右に枝分かれた六本の支刀。しかも中心部刀身とその枝部刀身の断面を、それぞれ菱形の刃物に鍛えながら作刀した技は想像を絶する高度なものである。

中心刀身から角（つ）のように突起した六本の支刀は、現代技術でいう溶接のようにそれぞれ完成したものを後から接合したのではなく、一つの鋼塊から鍛練して打ち出し、槌を用いて形造られたものだろう。

古代百済の山野から産出する砂鉄や鉄鉱石を製錬して鉄を取出し、さらに精錬して純度の高い鋼（はがね）塊を抽出する。これらの技術は秦（しん）や漢など古代中国から朝鮮半島に陸伝いで伝来した技術によるところが多かったに違いない。

七支刀に刻まれた銘文から想像すると、今から千六百三十年前の西暦三六九年、百済の国王は配下の工匠にこのような勅命を下したかもしれない。

「わが百済の国と極めて親密な間柄にあり、大恩ある倭国の王に一振り of 刀を献呈することになった。については百済国の面目にかけて、伝来技術の粋を結集して、技と権威の象徴ともなるべき名刀を造れ。刀一本分にあたる貴重な鉄素材を与えるので、心して鍛刀に専念せよ。万一、作刀に失敗するようなことがあれば、お前の首をはねるであらう。」

百済国王の命を受けた七支刀の刀工は、独特のデザインを創出するだけでなく、武器としての刀の要件を満たすために、「吹子（ふいご）」によって高温を保持した火炎で加熱しながら鋼を繰り返し鍛えたことだろう。加熱した材料を何度も折り返し鍛えるたびに、鋼に含まれる酸化物などの不純物を叩き飛ばす。

鋼は不純物をほとんど含まない、清浄で整然とした金属組成をもった刃物に変わる。無数の工程を経て、一塊の鋼は七つの枝を持ち、またとない形をもった剣に仕上がっていった。

次に研磨。鍛造によって形造られた刀身を砥石で研ぎ、銀色の光沢を放つ鋭利な刃物に仕上げる作業である。七つに枝分かれた菱形の刀身、とりわけ分岐、交差する部分をどのような技で磨きあげていったのだろうか。

おそらく左右に分岐したこの刀の完成時の重量バランスは、数グラム単位の精度に仕上がっていたことだろう。

現代の金属加工の分野では鉄鋼を素材に鉄成形品や道具を造る場合、およそ次の方法がある。

- 鉄を高温で溶かして、砂などを固めた鑄型に流し込み、冷却後取り出して用いる。鑄物。鑄造。形は作りやすいが、鑄物そのものは脆（もろ）いで、刃物や工具などには不向き。

古代の刃と電気バリカンの刃の
金属成分分析値比較表（％）

	「二子塚古墳」 出土 古代直刀	ヒコーキ印 電気バリカン 刃
C (炭素)	0.46	0.83
P (燐)	0.012	0.015
S (硫黄)	0.005	0.002
Cu (銅)	0.04	0.3
Mn (マンガン)	0.01 以下	0.24
Si (シリコン)	0.04	0.17

【出典】
『季刊 考古学』1984・8
佐々木稔、村田朋美
「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」
より。

極めて乱暴な記述で両氏からはお叱りを受けるに違いないが、この上古刀（四〜八世紀に作刀されたもの）とヒコーキ印電気バリカンの刃の金属成分を比べてみた。
料理の際、各種の調味料やスパイスを少量つつブレンドするように、鋼は鉄（Fe）を主成分として、数種類のきわめて微量の自然元素が作用し合ってその特性や個性を発揮する。
刃の硬さや性質を決定づけるものは炭素（元素記号C）。炭素量が多いものほど硬度は増すが、当然折れやすくなる。燐（リン 元素記号P）、硫黄（イオウ 元素記号S）などの元素は刃物の切れ味に害をおよぼす不純物とされ、これらの含有値が低いほど良質かつ清浄な刃物といえる。

群馬県の南部、安中市梁瀬の「二子塚古墳」（五世紀後半築造と推定）から発見された錆びついた一振りの鉄刀は、石上神宮の七支刀とほぼ同時代のものといわれている。
この古刀の金属成分を新日本製鉄株式会社第一技術研究所・佐々木稔氏、村田朋美氏の両氏が分析された資料が残っている。

七支刀は四、の工法で造られた。この工法とまったく同じ技術は、現代の自動車工業などの分野でも広く常用されている。

- 二 鉄の薄板や平板を硬度の優る刃物などを用いて一定の形状に切断、あるいは刃物の付いた重い金型を素材に落下させ型抜きし、あるいは立体に成形する。現代では刃物を用いず、レーザー光線などで自由に平面形状に切断することができ、金属カバーや低級な刃物などの製作に採用。プレス加工。
- 三 鉄の塊を硬い刃物などで削り、穴を明けするなどして形を形成する。近代になつて電気動力が出現し、旋盤やフライス盤などによる切削加工が一般的になつた。機械加工。
- 四 鉄鋼を赤熱するまで高温にして軟らかくし、槌などで叩き、鍛えながら一定の形状に整える。単純な成形は可能だが、複雑な形状、刃物などを均一な規格で製作するには極めて高度な技術が必要とする。鍛えることにより金属組織が緻密になり、硬度もねばりも増す。熱間鍛造。

右表で見るとおり、古代の刀と現代の電気バリカンの刃の金属成分含有率は酷似しており、用途の違いによる炭素（C）量は若干の差があるものの、刃物の性能を決定的に左右するといわれる不純物のリン（P）、硫黄（S）の含有量にいたっては現代鋼と同等か、それをしのぐ清浄度を示している。

また、金属の「錆び」への耐性はその含有量が少ないほど良いとされるマンガン（Mn）、シリコン（珪素 Si）などが、現代鋼に比べてケタ違いに少ないのもこの上古刀の特徴である。

上古刀のなかには千年以上土中に埋蔵されていても「錆び」によってその刀形が失われず、掘り出された後、錆びを取り除いて研磨することで再び銀白色の光沢をもった刃物に甦（よみがえ）るものがある。信じられないほどの品質である。

もしも、電気バリカンの刃を今から千五百年先、西暦三千五百年代に生きる未来人が土中から発見したとしたら、それはおそらく芯金も崩壊した錆びの塊が、手にとることも出来ない粉末となっていることだろう。

十代の時、初めて七支刀の姿にふれた私は、その持つ魔力に導かれるように、鋼（はがね）を扱う製造業の世界に入った。

「鉄」や「鋼」は人間のあらゆる分野の生活に深くかかわっており、産業の根源とも言える大自然の賜物（たまもの）である。

これまで何度も「もの造り」の事業を放擲（ほうてき）することを考えたこともあったが、それを翻意させたのはあの七支刀の霊力だったのかもしれない。

仕事を通してさまざまに「もの造り」の現場に立ち合う。そのたびに思うのは、古代と現代の技術、製法の驚くほどの共通性と不変性である。金属製品にいたっては、古代から残る品々その一つ一つをとりあげれば、現代の製品よりもはるかに優れた創案と技術を顕しているものがある。

デジタル表示に頼るではなく、マニュアルに従うではなく、自ら製作道具を工夫しながら、自然から与えられた素材に精魂傾けて挑戦した古代の匠（たくみ）たちがいた。

彼らから受け継いだ数千年の歴史の果てに、今私は立っている。亡くなった父の笑顔、電気バリカン工場で黙々と働く職人たちの姿が、七支刀の刀形に重なって見えてくる。

了

この作品は広島県商工会連合会ほかでの講演原稿に新たに加筆したものです。執筆にあたって広島県立工業技術センター主任研究員・刈山信行氏、広島大学文学部考古学研究室・古瀬清秀教授より貴重なご助言と資料のご提供をいただきました。ここに謝意を表すとともに、ご両氏のご研究の成就を心よりお祈り申し上げます。

参考文献

- | | | |
|---------------------|----------------|----------|
| 「大和古寺風物誌」 | 亀井勝一郎 | 大和書房 |
| 「わが精神の遍歴」 | 亀井勝一郎 | 講談社 |
| 「亀井斐子歌集『終い薔薇』」 | 亀井斐子 | 中央公論事業出版 |
| 「短歌の私、日本の私」 | 坪内稔典 | 岩波書店 |
| 日立金属株式会社広報部ホームページ資料 | 長谷川熊彦 | 日立金属(株) |
| 「砂鉄」 | 長谷川熊彦 | 技術書院 |
| 「中国地方製鉄遺跡の研究」 | 広島大学文学部考古学研究室編 | 溪水社 |
| 「日本全史」 | 講談社 | |
| 「週刊朝日百科8 日本の国宝」 | 朝日新聞社 | |
| 「海の正倉院 宗像 沖ノ島の神宝」 | 宗像大社 | |
| 「石上神宮略記」 | 石上神宮社務所 | |
| 「大阪府近つ飛鳥博物館常設展示図録」 | 大阪府立近つ飛鳥博物館 | |
| 「毎日グラフ別冊 古代史を歩く 飛鳥」 | 毎日新聞社 | |
| 「消えた王国」 | 崔仁浩 著 中村欽哉 訳 | (株)スコラ |

おじさんの青春日記 くそのちく

新世紀突入記念！ 特別付録

おじさん、おばさん必読！

おじさんの新・国語辞典

死語の部

【愛】金銭で表現する人間の感情のこと。昭和後期、美空ひばりの名曲「愛算々」が流行しこの傾向がなお顕著となった。

【愛玩】あいがん。動物。子供の躰(しつけ)を放棄した主婦などが人間に比べ飼育の容易な小動物を溺愛する現象。

【商い】語源は「飽きない」。悪徳新商法が次々に現われ、刺激的でない良心的な昔ながらの商法は消費者から飽きられつつある。

【意匠】装飾的考案。昔は美校出のデザイナーの独壇場だったが、今やパソコン操作に長けた情報処理技術者が専ら従事するようになった。

【花魁】おいらん。高さ十センチほどもある履物をはき我が物顔で繁華街を闊歩する若年婦女子をさす。なかにはこの履物のまま自動車を操り、事故を起こす低脳者もいる。

【釜の飯】かまのめし。同じ を食った仲、と言った時代もあったが、今はPTA帰りのオバサン達が群れをなしてゲイバーで食事や飲酒にふけり狂騒する有様をさす。

【諫言】かんげん。大臣が切腹覚悟で殿様を説諭すること。サラリーマンの世界では部下への言葉と上司への言葉を巧みに換えて使い分けることを言う。この場合、換言、と書く。

【肝】きも。大らかで豪快な男を が太い、と言った時代があった。現代は男子の肝(臓)が錆びついて退化しつつあるという。
「逆フォアグラ症候群」と命名されている。

【金玉】厚生省調査によれば日本男子の権威低下に伴い、成人男子の精子の量が激減してきているという。医学界ではシドニーオリンピックにちなんで評価を一ランク下げ、「銀玉」と呼称変更することが検討されている。

【玄人】くろうつと。昔は花柳界等で働く女性をさした。今日では一般OL、女子大生などの風俗営業分野への進出が著しくなっており職業区分が不可能となり、労働省を悩ませている。対：素人。

【恋文】こいぶみ。怪音とともに小型機器に夜昼分別なく着信する、世間迷惑な異性間の往来文。

【高利貸し】テレビなどでタレントを用いて安易に高利息の金銭借入れをすすめる企業。無人貸出機を開発し、貸し手の良心の痛みを軽減する考案もなされている。

【腰巻き】男女が本来上半身に着用するべきセーター等を腰に巻き、袖で結んで歩行する現代ファッション。大正時代珍重された桃色の毛糸腰巻きの名残り。

【選良】せんりょう。国家、地域のために私心を捨てて尽くす人のこと。特に代議士をさす。最近では銭量(せんりょう)の字を充てられることもある。

【獅子頭】ししがしら。東京・渋谷界隈を闊歩する子女の髪型をさす。白、金、銀などの極彩色で彩る。狸のごとく両目の周囲を縁どる隈(くま)塗りは歌舞伎の舞台化粧の影響、ともいわれてイナイ。

【始末】をす、とは節約、儉約するの意。私欲のためでなく、省資源、環境配慮という点から極めて今日的意味をもつ言葉。

【純潔】じゅんけつ。もはや日本に存在しない現象といわれ、文部省においてこの単語の辞書、教科書等からの削除が真剣に議論されている。

【女傑】じょけつ。かつては男まさりの有能、闊達、大胆な女性をさした。現代においては至極普通の有様となり、かわって「男傑」という言葉が辞典に新たに加わった。

【ズロース】女性が着用するやや長めの下着。省資源が叫ばれてこのかた、局所を蔽う布地が極端に小さくなり用途効果に疑問が呈されるようになった。英：変化 ズロース、ズル、ズロウン

【青雲の志】せいうんのこころざし。昔は、大志を抱いて懸命努力を続ける青年の情熱の意だったが、現代では「留学」と称して目的もなく海外に出かけ、イエローキャブなどといわれ現地住民の輦蹙（ひんしゆく）をかう婦女子をさす。性運の志、とも書く。

【星宿】せいしゆく。倒産、家出などで家を失ったホームレスの意。

【帝都】東京の意。在東京のテレビ局等では日本国に他に都市が無いのかのごとく帝都中心の低俗情報を専ら発信し、地方独自文化の発展を妨げ若者風俗の糜爛（びらん）を助長している。

【道徳】道で百円拾って徳（得）をした、というのが語源。

【売薬】ばいやく。越中富山の製薬会社販売員が家庭薬を担いで全国津々浦々の家庭を訪問販売していた時代があった。

現代ではインターネットを用いて不如意な男性にバイアグラなどを高額不法販売する行為をさす。

【腹】はら。心づもり、内心。今は「皮下脂肪」の多寡をさす。三段腹、五段腹、波状腹、太鼓腹と各種ある。

【パンパン】終戦直後、生きるためにやむなく米兵等に身体を供した女性達。現代は援助交際などとタワケタ表現のもとに、ケイタイ片手に不良中年等に対価を要求して遊び相手となる少女たち、をさす。

【PTA】（P）パパなんか（T）とても入る余地のない（A）遊び場所、の略語。頼りない夫への不満やオバサンパワー爆発の場となっているため、学校の先生方は会合前日に医師の検診を受けて会に臨んでいる。

【不定愁訴】ふていしゆうそ。昔は「ストレス」の意だったが、現代は帰宅拒否症など家庭内で居場所が定まらない父親など男性の不満をさす。不定住訴とも書く。

【踏み倒し】大店（おおだな）呉服商、土木請負業者などが幕府要人と結託し居直って、両替商（銀行）からの借財を勝手にチャラにすること。「借りたもの勝ち」の風潮が人心の荒廃を招来している。

【別嬪】べっぴん。テレビや雑誌等に多数登場する同じ化粧、表情をした無個性、低質の十代芸能人や一般子女をさす。心 と形容される。女子は現代では稀少のものとされ珍重される。

【泡沫】ほうまつ。一九八〇年代後期、投機に走ってうたかたのごとく生まれ、またたく間に消えた資財とそれにより生まれた人心の乱れをさす。あわ。

【妾】めかけ。昔の大物政治家、実業家等の必須アイテム。今では普通のオバサンが容姿美麗な青年男子に金銭を貢ぐことをさす。

キムタク結婚！ ザマアミロ！ テレビ狂いのおばさんども！！

【遺言】 かつては故人の精神を遺族に伝えるものであったが、現代においては全くかえりみられることなく「遺産」のみに関心が集中するようになった。

【夜這】 よばい。古事記にもある由緒ある言葉。青年男子の寝所に時刻もわきまえず不法に訪問し性愛を教授する若年婦女子の行為。

【萬屋】 よろずや。人間の時刻概念を麻痺させ購買本能を24時間刺激する、コンビニエンスストアの意。因みに本辞典の編者は重度のコンビニ中毒患者。

【倫理】 中国五経「礼記」にある言葉。人として守るべきみち。現代においては個性や創造性が尊ばれるようになり、各人がその場のぎで自由に決定できる肩の凝らない世の中になった。

つづく

「おじさんの新・国語辞典」編纂室では皆様から「死語、新語、造語」などのご投稿をお待ちしています。採用分は次号「おじさんの青春日記」でご紹介いたします。採用分は高額の手料をお支払い イタシマセン。